

投稿

博物館・科学館に天文系学芸員は何人いる？

加藤 賢一（大阪市立科学館）

皆さんはこの日本に物理、化学、天文などを専門にしている学校教員が何人いるかご存知ですか。もちろん、概数で結構ですが。と言っても、公式な数字はありませんから、推測するしかありません。平成 14 年度現在の高校・大学の教員が合計 42 万人（『文部科学統計要覧』平成 16 年度版から）ということから見ればいくらなんでも 10 人、100 人ということはないでしょう。1%として 4000 人、これよりは多いはずです。

では、博物館・科学館で物理、化学、天文などを専門にしている職員（学芸員）は何人くらいいるのでしょうか。かいかも見当がつかない？ 学校教員よりは少ないとして、さて、10 人？ 100 人？ 1000 人？

正解は、物理が 15 人、化学が 18 人、天文は 51 人！

これは『全国博物館園職員録』（平成 14 年）に記載されている理系の学芸職員を数えた結果で、多少の分類ミスや数え間違いがあったとしても 100 人や 1000 人という数字にはなりません。多い？ 少ない？ 妥当なところ？ どうお感じでしょうか。

日本博物館協会は毎年、『全国博物館園職員録』を発行しています。ここには全国の博物館・科学館に所属している係長相当職以上および学芸員名が記載されています。基礎データはそれぞれの館が提出しています。学芸員には専攻分野が付されていますので平成 14 年版でそれを分類し、数えてみました。明らかに学芸員であることや理系であることがわかっている場合でも、分野が明示されていない場合はカウントしませんでした（例：国立科学博物館。ただし、この数は 10%を越える

ことはありません）。ですから、紹介している学芸職員数は下限を示しているということになります。

カウント結果を簡単にまとめると、

全博物館数	3,151 館
全学芸員数	4,882 名
理系学芸員のいる博物館	289 館
理系学芸員数	987 名

となりました。全職員数は 12,864 名ですので、平均すると 1 館あたり職員は 4.1 名、うち学芸員が 1.6 名です。理系学芸員のいる博物館は全体の 9%で、理系学芸員は 1 館平均 3.4 名いることになりますから、比較的大きな館に集中していると言えます。なお、実際の職員数はこれ以上ですので、ご注意を。『文部科学統計要覧』によると、平成 14 年度現在で、全博物館は 1,117 館、全職員は 11,428 名、そのうち学芸職員は 3,213 名とされていますので、『全国博物館園職員録』はより広範に採録していることがわかります。それにしても、学芸員数は「1.6 名」や「3.4 名」といった値です。学校なら分校より少し大きいといった感じでしょうか。これがわが国の博物館・科学館の実態です。

理系学芸員のいる博物館・科学館の内訳は、いわゆる公立館が 70%、私立館が 20%、国立系が 10%でした。私立館の半分（10%）は会社立であり、特に製造業関係企業の歴史館のようです。

理系学芸員 987 名の専攻分野を細分して数えた結果を表 1 に示しておきました。見てのとおりで、生物・地学という自然史系が 70%で、技術が 11%、天文が 5%です。天文が物理や化学より多いのはプラネタリウムや公共

天文台が入っているからです。それより、物理 15 名、化学 18 名には、正直、びっくりしました。また、博物館と言えば科学の歴史とは相性が良いはずですが、科学史・技術史専攻は 19 名、これにもびっくりです。大阪市には市立高校が 23 校あります。全国の物理・化学専攻学芸員より大阪市立高校の物理・化学教員の方が多いのではないでしょうか？物理・化学・科学史の学芸員は天文専攻学芸員より希少な存在なのです。博物館・科学館における理工系の占める割合を想像していただけでしょう。

天文専攻が物理や化学より多いとは言え、51 名とは少ない気がします。プラネタリウム館は 300 以上もありますから、従事者はそれ以上いるはずですし、当研究会の社会教育分野には 187 名が在籍しています（2006 年 9 月 4 日現在の名簿から）。『全国博物館園職員録』には文化センターや教育センターなどは採録されていませんし、それぞれの館の事情によるところもあるのですが、いずれにしろ、『全国博物館園職員録』という公的な色彩の濃い名簿にはこれしか載っていないのは確かなことです。

現在、博物館・科学館では財政難や指定管理者制度の適用により学芸職員が減少する傾向にあります。この調査データは平成 14 年度のものでありますから、ここで示した学芸職員数はわが国史上最高の値ではないかと思われます。これから公立館はますます直営から指定管理者に管理が移ることでしょうが、その時、この数字はどうなるのでしょうか。

それから、何年か前に学校教育と社会教育の連携（略して、学社連携。博物館等の資料や人材を学校現場で活用しようという政策。ゆとりの時間の導入に伴って構想され、学芸員を学校に派遣することで実現しようとした）が声高に叫ばれた時、私は大きな誤解をしていました。学社連携が話題になった時、

正直、とても嬉しくてなりませんでした。「やあ、学校がわれわれを助けてくれるぞ！」と思ったからです。学校の先生方より学芸員の方が桁違いに少ないことを知っていましたから、学社連携とは学校が博物館・科学館を助けてくれること、と勝手に思い込んでしまったのです。ところが、ふたを開けてみれば全く反対！そこで、博物館・科学館の現状を広く知っていただく必要があると思い、きちんと学芸員数を調べてみようと思いたのがこの調査でした。最近、最も身近な関係者である本会の皆さんもこんな現状を知っているのかなとちょっと気になり、ご紹介しようと思った次第です。

調査の詳しい結果は『大阪市立科学館研究報告第 15 号』（2005）に掲載されています。下記のホームページでもご覧になれますので、よろしかったらどうぞ！

<http://www.sci-museum.kita.osaka.jp/~kato/scurator.pdf>

分野	学芸員数	割合 (%)
科学・自然	80	8.1
生物	522	52.9
地学	164	16.6
天文	51	5.2
物理	15	1.5
化学	18	1.8
技術 ^{*)}	111	11.2
科学・技術史	19	1.9
教育	7	0.7
合計	987	100

^{*)} 産業・農林漁業・医療等を含む

表 1 分野別理系学芸員数

加藤賢一